

イメージのなかに、ダイナミックな真実性、このイメージのさまざまな要素のあいだにある不一致と緊張の力学が持ちこまれた。人間は自分自身と一致することをやめた。したがって、人間が筋書きに完全に覆いつくされるということもなくなった。(Bakhtin, 1981, p. 35)

人が自分自身とのこのような不適合をつくりだしたのは、まさに未完の現在と（したがって未来と）接触したこの領域である。人間のなかには常に実現されなかった可能性、実現されなかった要求が残されている。未来というものが、それは個人と不可避に触れ合い、その根を彼のなかにもつ。(Bakhtin, 1981, p. 37)

バフチンはここで、資本主義的な個人主義が疎外や区画化や御都合主義という面をもつだけではないことを明らかにしている。それは、同時代性、開放性、流動性といった面、そして固定化された権威や絶対的な伝統からの自由という面もあわせもつ。そして、「永遠に求める、自分自身を探究する、すべての既存の形式を再検討する」(Bakhtin, 1981, p. 39) 潜在力をもっている。

しかしバフチンはここで立ち止まらない。彼のアイデアは、個人主義の楽観的な側面を示すということに限定されない。逆に、彼の主要な発見は、個人主義の直中から立ち現れる社会性の新しい質の可能性である。彼は、この新しい潜在力を小説のなかに予感した。

小説は、芸術的に組織された社会的ことば (speech) のタイプの多様性（ある場合には旨語の多様性）、

および個々の声の多様性として定義できる。どんな単一言語もその内部で、社会的方言、グループに特有の流儀、職業的な隠語、ジャンルの言語、世代や年齢に固有の言語、特定の傾向をもつ言語、権威者の言語、サークルの言語や束の間の流行語、特定の日、時間に、社会的・政治的目的で用いられる言語（毎日が固有のスローガン、語彙、自己の強調点をもっている）等に層化している。このようにあらゆる言語がその歴史的存在のあらゆる瞬間において、内的に層化しているということが、小説というジャンルの不可欠の前提なのである。小説はそのすべてのテーマを交<sup>オキクレストレイト</sup>響させる。それは、ことばのタイプの社会的多様性とそうした条件のもとで豊かに花開くさまざまな個人の声によって描写され表現された対象とアイデアの世界の全体性である。作者のことば、語り手たちのことば、挿入されたジャンル、登場人物たちのことば——これらはすべて、異種混交 (heteroglossia) を小説に導入するための基本的な構成単位にすぎない。そのどれもが社会的な声の多様さと、(常に程度の差はあれ対話化された) それらの結びつきと相互関係の多様さを認めているのである。発話と言語におけるこの独特な結合と相互関係、異なった言語とことばのタイプによって動いていくテーマ、社会的な異種混交の細分化、対話化——これらが、小説の文体の基本的特徴である。(Bakhtin, 1981, pp. 262-263)

ここで考察されている新たな社会性は、共通の対象をめぐって交<sup>オキクレストレイト</sup>響し組織された異種混交<sup>(2)</sup>でありポリフォニー<sup>(3)</sup>である。認知科学の用語をかりるなら、おそらく並列的分散処理システムを話題にすることができらるだろう。そうした並列的分散モデルを社会的な基礎にする活動システムの展開は、共通の対象／動機と共通の道具を分かち合うグループや個人のローカルあるいはグローバルな範例

ネット、ワークとして考えられるかもしれない。

しかし、そうした社会的構造は、学者共同体の古典的なアイデア、あるいは関係する研究グループの不可視の仲間集団といったものと、どう異なっているのだろうか。バフチンが参考になる。「小説は、その時代のあらゆる社会・イデオロギー的な声を、つまりその時代のあらゆる、多少なりとも本質的なクレイムをもつ言語を代表せねばならない。小説は、異種混交の小宇宙ミクロコスモスでなければならぬ」(Bakhtin, 1981, p. 411)。拡張的学習と拡張的研究に適用すれば、これは次のことを意味する。活動システムにおいては、さまざまなグループや階層の声、衝突し補完し合っている。こうした声のすべてが、含みこまれ役立てられねばならない。バフチンが示しているように、これは、一般の人々の声(声)と、学問的なものとは別のジャンルを明らかに含む。それゆえ、単一の学問的なことば遣い (speech) のタイプの内部での古典的な議論の代わりに、私たちは異質なことば遣いや言語のおつかり合う火花を見るのである (バフチンの対話的アプローチに関するさらなる分析については、Morson, 1986; Radzikhovskii, 1987; Todorov, 1984 を参照)。

並列分散システムあるいは範例ネットワークというメタファーは、社会性の空間的次元にとりわけ言及したものである。時間的次元、つまり過去の人々との協働は、たとえば、ダーウィンのフンボルトとの「会話」(Gruber, 1984, pp. 13-14 を参照)、アインシュタインのニュートンとの「会話」(Glazman, 1972, pp. 209-212 を参照) によく示されている。しかしながら、これらはいまだ偉大な人々によってなされた対話の例にとどまっており、単一のことば遣いのタイプの内部で行われている。異種混交は、必ず、こうした間接的な協働の性質をつくり変える。科学者個人が過去の先達と議論す

ることに代わって、私たちは、公にされた古典理論から、点在する残存物や個人的な記憶のなかのみ保存されている実践的経験にまでわたる、過去の多様性と会話するような、並列分散ユニットからなる異質混交共同体をもつのである。

## 12 第三の仲介的バランス

本章で私は、拡張による学習（これは、集団的で拡張的に習得された活動の歴史的に現れつつあるタイプと、緊密に結びついている）がそれ自身、理論的思考の道具を要求することを論じてきた。一般的にいつて、そうした拡張的思考は、抽象から具体へと上向する手続きとしての概念の、新しい考え方を必要とする。これは、弁証法的思考の論理的な本質である。

こうした一般の道具の範囲内で、第二の道具の三つのタイプを区別できよう。スプリングボード、モデル、ミクロコスモスである。モデルのなかで歴史的にもっとも発達したタイプは、胚細胞モデルである。これは、当のシステムの発達と転換を引き起こすような、原初的でシンプルな矛盾関係を表現する。

抽象から具体への上向は、個人的行為から質的に新しい集団的活動への拡張的移行の論理に合致する。つまり、拡張的移行にとつての第三の道具である弁証法は、孤独な思考として理解することはできない。第三の道具と結びつく社会性の特殊な形式は、バフチンによって異種混交あるいは交響す

るポリフォニーとして特徴づけられた。

本書の最終章に向けて、次のような問いが明らかになる。何が拡張的な交響化オーケストラレーションのルールなのか。どのようにして多様性のなかでの統合を創造するのか。

## 拡張的方法論に向けて

### 1 「文化」歴史的な方法論のサイクル——ヴィゴツキー、スクリブナー、コール

シルヴィア・スクリブナー (Scribner, 1985) は、「ヴィゴツキーにおける歴史概念の使用形式」というすばらしい論文のなかで、ヴィゴツキーの方法論の特徴を次の四つのモメントにまとめている。

1 ヴィゴツキーは現代の、未開ではない、成人の行動の観察から始めた。彼の研究の出発点は、ほとんど注目されることのなかった、日常的で文化的な行動形式であった。ヴィゴツキーはこれを「未発達 (rudimentary) の形式」と呼んでいる。文化的な行動形式の構造は、外界からの刺激とそれに対する反応、およびその間を媒介する人間が作りだしたシンボルの刺激、の三つの要素からなっている。それぞれの形式は「高次の行動への鍵」なのである。

2 未発達の様式がどのように新たな形式へと変化するかを確定するためには、日常の現代人の行動の観察から構造の歴史的な変化の分析へとシフトする必要がある。歴史的・民族誌心理学的な (ethno-psychological) 情報によって、未発達の様式が高次のシステムへと変化する諸段階を再構成することができるのである。

3 歴史的な順序は、子どものなかに人為的に引き起こされる、つまり実験的な手法によって引き起こされる変化のモデルとしての役割を果たす。実験は、文化的発達が個体発達においてどのように進行するかを「純粹で抽象的な形式で」明らかかなものとするだろう。したがって実験的発生的方法は、三つめの方法論的なモメントであり、もつとも豊かで決定的な証拠を生み出すものである。

4 現代の子どもたちの実際の発達過程を観察することは、理論構築のための四つめのモメントとなる。ヴィゴツキーは、実験的な研究から生まれたモデルは必然的に図式的で単純化されたものとならざるをえないと信じていた。実験によって高次のシステムがいかに子どもの中に実現されるかを明らかにすることはできない。というのも、実験的に導き出された過程は、決して生活のなかで生じる発達をそのまま映し出すものではないからである。まして実験によつては、子どもたちが成長するさまざまな状況のなかで示す行動の多様性を把握することはできない。実験は発達の過程をモデル化するものではあるが、実際の研究では、自然な場面で観察される行動と実験場面で観察されるものを調和させることが必要である。このように、ヴィゴツキーは高次の精神機能の歴史についてのモデルをつくり、またそれを検証するために、日常生活における行動の観察から出発し、またそこに戻っていったのである。(Scribner, 1985, pp. 135-137; 以下も参照。Wertsch, 1985c, Chap. 2)

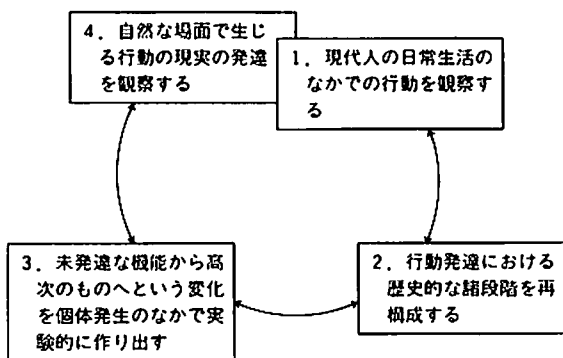


図5・1 ヴィゴツキーの方法論の4つのモメント  
(Scribner, 1985 より)

スクリブナーによるヴィゴツキーの方法論の再構成は、図5・1のようにまとめることができるだろう。

スクリブナー自身は、ヴィゴツキーのこの図式に重要な考察を付け加えている。

ヴィゴツキーの理論では、(…)歴史は社会文化的な変化の単一で一方向的な道筋とみなされている。歴史は、人間の行動に固有の諸形式の発生やその構造・機能の過去における変化を私たちに教えてくれる、世界共通の過程なのである。(…)具体的な研究の過程では、また現在における理論の発展のためには、こうした見方は不適切であるように思われる。さまざまな社会や文化集団は異なるテンポで、また異なる様式で世界の歴史に参加していく。それぞれの社会には、現在の変化の性質に影響する、独自の過去の歴史がある。(…)それぞれ別の社会集団の歴史は、世界の変動から独立



であるわけではないが、またその逆にそこに還元されてしまうものでもない。こうした社会の複数性を説明するためには、(…) 個別の社会の歴史を組み入れていくようにヴィゴツキーの枠組みを拡張する必要がある。(Scribner, 1985, pp. 138-139)

スクリブナーはまた子どもの発達のみに焦点を合わせることの不適切性も指摘し、「子どもの歴史」を「生涯の歴史」に置き換えることを提案している (Scribner, 1985, p. 140)。

最近の論文のなかで、マイケル・コール (Cole, 1986) は、文化・歴史的な方法論をより精緻なものとするために一歩先に歩みを進めている。彼はソビエトの文化・歴史学派およびその影響下で自分たちの研究グループが行ってきた研究、特に比較文化心理学の領域での諸研究を分析し、次のような結論を下している。

ソビエトの研究は伝統的に、(…) 具体的な活動の場 (setting) の違いにもなって生じる多様性を多少犠牲にしても、心の本質の広範な歴史的变化を強調してきた。ソビエトの社会・歴史的学派のなかで実証的な研究が行われるようになったのは比較的後のことであり、その研究も、特定の活動システムやそれが生じる機能的心理システムについての詳細な検討を行う代わりに、政治・経済的体制の大規模な歴史的な転換に焦点を合わせるといふ、初期の研究の傾向を引き継いだものであった。

アメリカの研究は伝統的に、特定の社会・文化的な実践と結びついた特定の認知の領域における、共時的で文化的に制約された「条件のなかでの」違いを説明したいという応用的・実証的な必要性から出発

した。その結果、どちらかといえば表面的で非歴史的、折衷的な土台の上に非常に多くの研究が生み出されたが、それは同時に、文化集団内で文脈の違いを超えて生じるパフォーマンズレベルの差異をコントロールしている要因は何かということを論じる際の根拠として、強固な方法論的、学際的研究の基礎を作り出した。

(…) 全体的に見るならば、比較文化的な研究から出発した社会・歴史学派の現在の発展は、文化的な文脈と具体的な活動システムの研究を強調するアメリカ的伝統と、高次精神機能の媒介された構造と歴史および政治・経済の重要性を強調するソビエト的伝統の研究の結合の過程とみなすことができる。

(Cole, 1986, p. 19-21)

スクリブナーとコールによってなされた方法論的な拡張は、ヴィゴツキー、ルリヤ、レオンチエフの本来の意図に完全に沿ったものであり、「彼らの研究のなかではまだ不完全にしか実現されていなかった」(Cole, 1986, p. 21) 意図を実現したものであった。

## 2 拡張的方法論のサイクル

ヴィゴツキーの方法論的なモメントと、第3章で示した拡張的な移行のサイクルを比較するのは有意義だろう。そこで、図5・2にこのサイクルを再度示しておく。

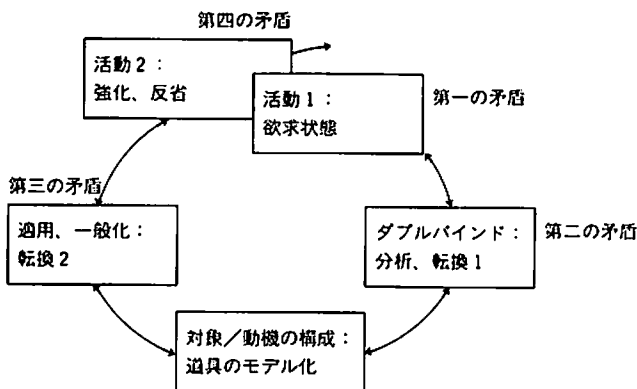


図5・2 拡張的移行のサイクル

ヴィゴツキーの方法論的なサイクルでは、研究の最終的な対象は高次の機能システム、あるいは個体発生的な発達における行動の高次の形式である。一般的な文化の歴史は、特定の社会や活動の場の歴史とともに、個体発生を理解し、再構成するための仮説をたてる上で役立つ。一方、個体発生は、基本的には内化として理解される。研究は一般的に言えば、社会・文化的に与えられたものの分析から個人が獲得し、内化したものの分析へという方向で進行する。スクリブナーとコールの論文も、基本的にはこの方向に沿ったものとなっている。

まだ説明されていないのは、行動の社会・文化的に媒介された形式、あるいは活動の場、あるいは社会が、最初の段階でいかに生み出され、また作り出されるのか、という点についてである。ヴィゴツキーのサイクルの四つめのモメントは、変化を説明するものではあるが創造を説明するものとはなっていない。

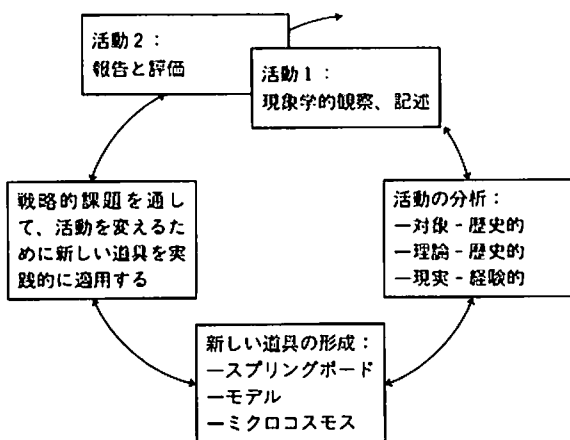


図5・3 拡張的発達研究の方法論的なサイクル

拡張的な移行のサイクルはまさにこの問題に焦点を合わせている。それは、具体的な人間の集合による、社会・文化的にみて新しい活動システムの生成の過程をたどるものである。ここでは、個人的に表明された疑いやためらい、混乱が出发点となる。それは個人的なものから文化・歴史的に社会的なものへ向かう。けれども、個人の出発点はそれ自身文化・歴史的な産物としてのみ理解可能である。

明らかに両方のサイクルは現実のそれぞれの側面、より正確には歴史のサイクル運動のそれぞれの側面を表している。歴史は内化されるものであると同時に拡張されるものでもある。第2章で示したように、「芸術心理学」との関連で言えば、拡張的な移行という観点はヴィゴツキーにとつては必ずしも異質なものではない。けれどもそれは彼の一般的な方法論のなかに統合されなかった。レオンチェフの研究では、

拡張という概念は活動へと成長する行為の現象として現れる。けれども、これもまた、彼の研究のなかでは脇道にとどまっていた。

二つのサイクルは一般的な方向としては反対を向いているが、具体的な研究のステップについて見ると内的な構造はきわめて似通ったものとなっている。この類似性は拡張的な移行のサイクルを発達研究のサイクルに適用するときによりいっそう明らかなものとなる(図5・3)。

以下では図5・3に示された方法論的なサイクルの各ステップを簡潔に説明していく。説明は拡張的な研究の方法論を包括的に示すものではなく、概略についてのスケッチにとどまるだろう。包括的な説明は具体的実証的な研究と結び合わされ、補われることによってのみ可能であり、将来の課題として残されている。

### 3 『活動システムの現象学的観察と記述』

拡張的な発達研究の最初のステップは、(a) 活動にかかわる者によって経験される言説や問題の本質について予備的な現象学的洞察をえること、および、(b) 現在研究中の活動システムを記述することからなる。

(a) に関して言うならば、研究者の課題は、活動の参加者によって経験される、問題や疑い、不確実さの根底にある欲求状態と第一の矛盾とを把握することからなっている。このことは、活動につい

ての内的な、また公的な議論を包括的に読み解くことを通じて、また参加的現場観察 (participant on-site observations) を通じて、さらにその活動にかかわっている人々や活動に熟達した人々との議論を通じて達成されるだろう。

(b) に関しては、拡張的な研究は活動「一般」を扱うわけではなく、特定可能な場における特定可能な人間によって実現される実際の活動を扱うものである。記述とは、活動に従事する個人と、それが行われる地理的な場所を特定し、さらにその活動の境界を特定する、まさにその行為のことである。現象学的な観察の後に記述をおく理由は明らかである。活動の場と境界はしばしば比較的広範な「住み込み」(dwelling) の後にしか適切に定義されえないからである。

## 4 活動の分析

第二のステップは活動システムの厳密な分析からなる。この分析は、(a) 対象・歴史的な分析、(b) 理論・歴史的な分析、(c) 現実・経験的な分析という三つの分析に分けられるだろう (Holzkamp, 1983 を参照)。

(a) 対象・歴史的な分析は、活動システムの連続的な発達の相 (Phase) を同定し、分析することを意味している。けれどもそれはたんに時期を区分するためのものではなく、ひとつの発達の相から次の相へと移行する際に生じる第二の矛盾を顕在化させるために行われるものである。この分析を行

うにさいしては、前に示した三つの事例〔第3章第7節、第4章第4節、第5節〕で用いられたような、移行の継起的構造を記述するための技法ばかりでなく、図2・6、図2・7に示されるような活動の一般的モデルも使われる。

レオンチエフが強調しているように、どんな活動でも、活動のアイデンティティを一義的に決定するものは対象である。したがって、分析の出発点となるのは対象の質的転換であり、そこでは対象それ自身がひとつの活動システムとして理解されるのである。けれども対象的活動のシステムは、中心的活動の外部にあるもの、あるいはたんにそこに「結びついた」ものと考えられるべきではない。反対に、対象はそれ自身が相対的に独立した活動システムであることを認めるとしても、それは何よりも中心的活動の統合的な要素として分析されるべきである。中心的活動の「内側から出発して」対象的活動に向かい、また中心的活動に戻るといふこの分析の系統は、研究者が、研究対象としている活動の自己運動、すなわち自己組織的ダイナミクスを把握し続けようとしている場合には決定的に重要になる。言葉を変えて言うならば、対象―歴史的な分析は自己充足的な対象へと還元されることはない。対象は発達しつつある中心的活動の要素としてのみひとつの対象 (Gegenstand) でありえるのである。

(b) 理論―歴史的な分析は、活動システムがいかなる発達の相においても一組の第二のアーティファクト、すなわち概念とモデルとを共有しているという事実から出発する。これらの文化的アーティファクトは異なった様式、たとえば手引き書や作業手順、あるいは分類と診断のための決められた手続きなどのかたちで具体化されているが、それらはすべて原則として公共的な知識であり、実践的な

活動の一般的な概念的道具として機能している。これらの概念的道具がどの程度理論的と認められているか、あるいは理論に依拠したものであると認められているかは、ここではそれほど重要な問題ではない。本質的に重要な点は、それが部分的には中心的な活動の内て構成されたものであり、また部分的には外部から取り入れられたものであるという点である。理論が外部から取り入れられるというこの視点から、中心的な活動のなかに導き入れられた理論の発展の分析には、さらにいえばそうした理論の背後にある道具生産的活動の分析には、特別な注意が必要であることがわかる。ここでもまた記述的に時期区分を行うことは出発点としては必要なことだが、分析の主要な目的は、第二の矛盾の形成過程を特定し、跡づけていくことである。そして、そうした矛盾は、発達の連続的な段階で第二の道具が使用されることによつて引き起こされたり、あるいはそれと結びついたりしているものなのである。

(c) 公共的に利用可能で対象化された道具の使用には強い制約があるが、一般化されることによつて、それは常に多様なあり方で、また多様な目的のために解釈され、応用可能なものとなる。したがつて対象・歴史的、理論・歴史的な分析だけでは十分ではないことは明らかである。分析は、実際の活動の参加者が所有し使用している、内化され、作り出されたモデルの現実経験的な分析によつて補われる必要がある。

実際の経験的な分析を行う上では次の三つの原則が確認される必要がある。第一に、活動に実際に適用されるモデルは、可能な限り活動／動機、行為／目標、操作／条件という三つのレベルすべてで分析される必要がある（表3・1と表3・2を思い出してほしい）。第二に、モデルは宜旨的な概念



として、手続的な実際の遂行行為として、社会的に交わされる言説や相互交渉として、コミュニケーションのネットワークとして、さらに組織の構造として分析される必要がある。第三に、モデルは歴史的な分析（上記の(a)と(b)）の結果の助けをかりて、また前「前4章第7節」に提示した五つの一般的に歴史的にタイプ分けされたモデル（典型、分類的モデル、手続きのモデル、システムのモデル、胚細胞モデル）の助けをかりて分析される必要がある。

ここまで示してきた三種類の相補的な分析を行うことによつて、研究中の活動の発達の相における対象の単位を定義することが可能になる。対象の単位という言葉は、主体が一時に扱い、型どることのできる対象の一片、あるいはひとまとまりを意味している。このように単位を定めることにより、私たちは対象が素材の状態から最終的な産物へと変化する「ライフスパン」をたどることができるようになる。さらに、この単位は、活動の共同体内部のあらゆる区画・階層的なレベルとして直接的・間接的に扱われるので、個別の行為と全体的な活動のあいだにある断絶 (breaches) と結びつきを、コンパクトな形で研究できるようにする。ひとたび対象の単位が同定されれば、活動システムの内的な運動を目に見えるようにする戦略的なレンズ、あるいは拡大鏡が私たちの手にはいったことになる。分析を行うことのもうひとつの成果は、活動システムの次のさらに発展した発達の形態について、仮説的な像を描くことができるようになるという点である。けれどもそうした予測的なモデルは、拡張的な移行を達成するためにはまだ十分で一般的な道具ではない。むしろ、それは移行の過程を先へと導くために必要な略図のようなものである。

分析の最終的な目的は、活動の内的矛盾や、その発達の論理を研究者に示すことだけではない。活

助の潜在的な主体である参加者が第二の矛盾に直面するように促すこともまた目的となる。言葉を変えて言うならば、分析は、ダブルバインドを引き起こす産婆役として、あるいは少なくとも強い概念的な葛藤の形態で、ダブルバインドを予期的に把握させるために機能する。このことは、活動への参加者がみずからの行為を通じて分析を再構成することによって達成される。こうした再構成は、典型的には参加者同士の論争ばかりでなく、選ばれ、圧縮された素材を元にして生じる。ダブルバインドの発生と深刻化は、最初は部分的なものでしかなかったり、一時的に解決されたりしながら、いくつかの連続的な段階を経ながら生じるだろう。

## 5-1 新たな道具の形成

拡張的な方法論では、三番目の段階はもつともドラマティックなものであり、容易に認識できる。検討中の活動システムへの参加者は、ダブルバインドを解決するための鍵をえるために、質的に新たなモデルを形成せざるをえなくなる。本章の始めに示したように、このステップは次の三つの要素からなっている。(a) スプリングボードを見いだすこと、(b) 一般的な道具となるモデルとそこから派生するモデルを作り出すこと、(c) 道具となるモデルをさらに洗練させる責任を引き継ぐとともに、それを新たな実践の形態に変えていくためのミクロコスモスを構成すること。

(a) スプリングボードはどのようにして見いだされるのだろうか。目的的に促進したり方向付けた

りすることのできない、直観的な出来事ではないのだろうか。

別の選択肢となる概念を作り上げていくために、私はG・S・アルトシュラーの「真の科学としての創造性」についての研究を参考にしたい。アルトシュラーによれば、技術的な発明を行う上で決定的な問題は、対象に無関係な探索をいかに克服するかということであり、それはブレインストーミングやシンセティクス (syncetics) などのようなさまざまな方法で行われていることでもある。

たとえば、焦点化された対象法は、ランダムに選ばれたいくつかの対象の特性を、改善を要するひとつの対象のなかに移しかえる方法である。これは、結果として通常とは異なる結合を生み出し、心理的な固着を克服することを可能にする。したがって、たとえば「虎」が偶発的に選ばれた対象であり、「鉛筆」が改善すべき(焦点となる)対象であったとすれば、「ストライプの入った鉛筆」とか「肉食の鉛筆」とか「牙の生えた鉛筆」などの結合がえられる。そうした結合を検討し、発展させることによって、ときには独創的なアイデアを生み出すことができるのである。(Altschuller, 1984, p. 13)

言うまでもないことであるが、こうした対象に無関連な方法では「当たりを引き当てる」までに何千もの偶然的な結合が必要となるだろう。アルトシュラーは次のような比喻を用いてこうした方法の特徴を述べている。「曲がりくねった川を航行中の船の操舵手の行為を研究している状況を想像してほしい。私たちは川そのものを知りたいわけではなく、操舵手の行為を純粹に心理学的な用語で説明しようとしているだけなのである」(Altschuller, 1984, p. 8)。